

令和3年度  
中学生の主張東京都大会  
発表文集



中学生の主張東京都大会HP



※発表文集の電子版・  
大会当日の動画を  
公開しています。

令和3年度 中学生の主張東京都大会



発 表



## 開 会



発表者紹介

## 表 彰 式



知事賞受賞者インタビュー



受賞おめでとうございます

# 目次

1	開会あいさつ	東京都生活文化局都民生活部長	馬神祥子	3
2	発表者及び各賞			

## 知事賞

・ 兄の話	東京都立武蔵高等学校附属中学校	三年	坂口礼佳	4
-------	-----------------	----	------	---

## 東京都教育委員会賞〔氏名五十音順〕

・ 未来へつなぐ	あきる野市立増戸中学校	三年	奥山朋佳	5
・ 好きと伝えられる社会へ	板橋区立志村第四中学校	三年	菊池香帆	6

## 優良賞〔氏名五十音順〕

・ 差別の無い社会を	東京都立葛飾ろう学校	三年	大澤美輝	7
・ 一人一つの命	大田区立大森第八中学校	三年	鹿島靖媛	8
・ 「勇気の一步」	國學院大學久我山中学校	三年	佐藤瑛太郎	9
・ 矛盾する「正しい」	立川市立立川第二中学校	三年	下津浦美結	10
・ 2030年に向かって	葛飾区立金町中学校	一年	住吉拓己	11
・ 地球のためにできること	世田谷区立芦花中学校	三年	乳井美桜	12
・ 本当のバリアフリー	立川市立立川第八中学校	三年	吉田琉生	13

奨励賞 (氏名五十音順)

・わたしは諦めない	吉祥女子中学校	三年	伊藤瑛泉	14
・自尊の心を大切に	東京都立武蔵高等学校附属中学校	三年	大鹿乃愛	15
・文化の継承	東京都立桜修館中等教育学校	三年	佐久間心愛	16
・本が人生に必要な理由	東久留米市立南中学校	三年	佐々木朋美	17
・戦争と人々の思い	東京都立桜修館中等教育学校	二年	佐藤文音	18
・手紙を書くということ	東京都立桜修館中等教育学校	二年	島田海	19
・自転車から学んだこと	東京都立大泉高等学校附属中学校	二年	霜鳥隼杜	20
・個性と多様性	東京都立桜修館中等教育学校	二年	樋口愛菜	21
・災害への「備え」	立川市立立川第一中学校	二年	日野栞那	22
・休校中に学んだこと	立川市立立川第五中学校	三年	若林熙	23

3 審査員長講評

4 最終審査員の感想

5 令和3年度 中学生の主張東京都大会 当日の概要

6 【参考】令和3年度 中学生の主張東京都大会 募集概要

7 応募状況

8 過去の入賞者 (直近三年間)

9 令和3年度 中学生の主張東京都大会 動画配信について

(※掲載作品については、誤字・脱字以外は原文のまま掲載しました。)

審査員長講評	十文字学園女子大学教授	富山哲也	24
最終審査員の感想			25
令和3年度 中学生の主張東京都大会 当日の概要			27
【参考】令和3年度 中学生の主張東京都大会 募集概要			28
応募状況			29
過去の入賞者 (直近三年間)			30
令和3年度 中学生の主張東京都大会 動画配信について			31

## 開会あいさつ

東京都生活文化局都民生活部長

### 馬神祥子

東京都生活文化局都民生活部長の馬神でございます。

「中学生の主張東京都大会」の開会にあたり、御挨拶を申し上げます。本日参加の中学生の皆さん「中学生の主張東京都大会」への御出場、おめでとうございます。

さて、本大会は、中学生の皆さんが日頃考えていることや、将来への希望などを力強く発表することで、自ら成長する機会となることを目的とし、昭和五十四年から開催しています。第一回開催からこれまでに、約九万人を超える中学生に参加していただいています。

今年度は、新型コロナウイルス感染症を踏まえた「新しい日常」の中、感染に気を付けながらも、学校生活をはじめ、様々な活動が有意義なものになるよう一生懸命取り組んでいることと思います。

中学生の皆さんには、本事業の趣旨を理解していただき、SDGsや多様性など世界的な取り組みや、地域や学校など身の回りの出来事についての考えや想いを寄せていただきました。

今年度の応募作品数は、五、九三二となりました。

本日参加の皆さんは、これらの作品の中から、厳正な審査により選ばれた十名です。皆さんには、これまで準備してきたことを十分に発揮し、



想いのこもった素晴らしいスピーチをしていただけることを期待しています。

また、発表を通じて、中学生が自身の生活の中で、どのようなことを感じ、どのような思いをもっているのかを、我々大人が真摯に受け止め、理解を深める機会としていきます。

今後も、様々なことに興味をもち、これまで以上に広い視野と柔軟な発想をもって自己や社会と向き合いながら、未来を担う大人になっていただきたいと思います。

結びに、本大会を開催するにあたり、審査員の皆様、学校関係者をはじめとする多くの皆様に多大な御支援をいただきましたことに感謝申し上げます。開会の挨拶とさせていただきます。

知事賞



東京都立武蔵高等学校附属中学校 三年

坂口礼佳

兄の話

私には今年で二十歳になる兄がいる。一八〇センチを超えるすらっとした長身に、眼鏡のよく似合う端正な顔立ちをしている。学生時代は陸上の長距離の選手をしていたので、走ることが得意だ。たまに作ってくれる炒飯はとても美味しい。おまけに記憶力が良く、家族で出かけた日の日付を絶対に忘れない。私が体調を崩すと、心配してすぐに布団を敷いてくれる。大好きな、私の自慢の兄だ。

しかしこれまで、私は人に兄の話をしようとはしてこなかった。兄は、どこにいても独り言がやめられない。小学生用の計算ドリルにも苦戦する。苛立ちを抑えられずに人や物に当たったり、自分で自分のことを叩いたりしてしまう。人の話が理解できているように見えて、本当は何もわかっていないことが多い。私の兄には自閉症と中度の知的障害があるのだ。

物心つく前、私は多くの時間を兄とともに過ごしてきた。兄にその日の天気を教えてもらい、漢字を練習する兄の横に座り見よう見まねで字を覚えた。当時の私にとって、五歳上の兄は何でもできる憧れの人だった。だからこそ、私は長い間兄が障がい者であることと上手向き合うことができなかったのだ。

真新しいランドセルを背負って私が学び舎の門を初めて叩いたとき、兄は小学六年生になっていた。私の通う小学校では六年生が一年生に学校での過ごし方を教えるならわしがあった。それを聞いた私は、自分の兄を周りに紹介できる日を今か今かと楽しみにしていた。ところが、私の教室にやってきた六年生の生徒の中に兄の姿はなかった。兄を見つけられずに戸惑う私に、先生は「お兄ちゃんは六年生とは別のクラスで頑張っているんだよ。」と告げた。兄が他の「六年生」とは異なる「障がい者」として見られている事実が、針のように私の心を刺した。

それから徐々に、世間が兄を「障がい者」として見ていることを実感する機会は増えていった。バスやコンビニで大声を出し、周囲から避けられている兄を見ると、胸がぎゅっと締め付けられた。実際に「障がい者」である兄は、「障がい者は健常者と同じようには生きられない」という世間のイメージに守られ、また助けられてもいた。しかし、そのイメージこそが兄や障がいを持つ人を苦しめていることも感じた。社会は、障がいのある人の持つ「障がい者」のイメージと結びつかない部分を受け入れたいのだ。次第に私は友人から兄のことを聞かれる度に、曖昧に言葉を濁すようになっていった。友人が兄を「障がい者」として見たその瞬間に、兄は私の「自慢のお兄ちゃん」ではなくなってしまふ気がしたのだ。

ある日、夕食を食べ終えた私は、食卓で兄が折り鶴を作る様子をぼんやり眺めていた。ふと私は机の上に置かれた鶴を手を取った。四年前、兄は就職を目指していた作業所の仕事のひとつ、紙折りをできるようにするために、鶴を折り始めた。兄に折り鶴の作り方を教えたのは私だった。当時の兄は折り紙を半分に折ることもままならなかった。作業所に勤めるようになってからも、兄は毎晩鶴を折り続けた。あのころ、兄が何十分もかけて作っていた不格好な鶴が脳裏に浮かんだ。しかし、いま手に取った鶴はとても綺麗で、ピンと伸びた羽は今にもはばたかんばかりだった。

その時、私は思い出したのだ。兄は私の何倍も努力のできる人なのだとということ。真っ黒になった計算ドリル。履き古したランニングシューズ。折り鶴で一杯になった紙袋。私はこれまで、兄の「障がいを持っていて」という一面に囚われ、兄の持つ沢山の魅力を忘れてしまっていた。兄の魅力は、障がいがあるというたった一部分に負けるようなものではないのだ。私はその時、兄の持つ障がいを知ってから初めて、兄のことを誰かに話せるような気がした。私の自慢のお兄ちゃんを皆に知ってほしくなかった。

障がいも、能力も、性別や考え方も、その人の一部分でしかない。その一部分で人のすべてを判断することはできない。私は、大好きな人の持つ、多くの側面を知り、それを尊重できる人になりたい。

私はこれからも、兄の作った料理を食べ、兄と一緒にサッカーの応援をして、兄のゲームを借りて、兄の隣で生きていく。少しずつ、人に兄の話ができるようになるかもしれない。私がずっと話したかった、兄の話を。

審査員長のコメント

大好きなお兄さん。でも、そんなお兄さんを疎ましく思ってしまったことがあるという率直な回顧。複雑な気持ちの変化が丁寧に描写され、坂口さんの目を通してお兄様と接しているような気持ちになりました。大変感銘を受けました。

## 東京都教育委員会賞



奥山朋佳

あきる野市立増戸中学校 三年

## 未来へつなぐ

母が通う病院について行った時のこと。交差点の近くに石の塔があった。な  
んだらうと思つて近づく。「太平洋戦争の末期、山の地域に大空襲があり、  
赤坂・青山地域の大半が焦土と化しました。」と書いてあった。慰霊塔だった。  
今、私が立っているこの場所は、七十六年前、火と熱風により多くの人が逃げ  
場を失い、多くの人が亡くなったところらしい。今では想像もつかない。おしゃ  
れなお店が建ち並び、たくさんの方が行き交うこの街に、戦争の悲劇があつた  
ことに私は驚いた。

信号が青に変わった。みんな忙しそうに歩き始める。私は慰霊塔に軽く頭を  
下げて、慌てて横断歩道を渡った。なぜだろう？慰霊塔だけが別世界のもの  
のように感じられた。

それから半年後。中学生新聞を読んでいたら、一枚の写真が目にとまった。  
澄み渡る青空の下で、小さな男の子たちが元氣よく走っている。きれいな青空  
だと思つてよく見ると、顔には防毒マスクをつけ、手にはおもちゃの鉄砲と  
日本の旗を持っている。私は、一瞬なんの写真だか分からなかった。驚いて記  
事を読むと、戦時中に撮られた写真だということが分かった。ある大学生が、  
戦前から戦後の白黒写真を人工知能の技術を使って、カラー化したそう。記  
事には「白黒ではつながらない過去に見える写真が、カラーになることで自  
分と同じ時期に流れ込み、身近に感じられる」と書いてあった。確かに、写真  
に写っている子供たちは、公園で元氣よく遊ぶ今の子供たちと変わらない気が  
した。

他にも写真が載っていた。沖縄でアメリカ軍に降参する少女の写真。何歳く  
らいだろうか。女の子は白旗を手を持ちながら、敵の方へ歩いている。着てい  
る服はボロボロ、足は裸足だ。怖い思いをしてきたのだろう。家族はどうした  
のだろう。カラー化した写真を見ると、どんどん想像が膨らんでくる。

原爆ドームの前で夕涼みをする家族写真もあった。原爆ドームは当時、「産

業奨励館」と呼ばれ、今の原爆ドームの姿とは全く違っていた。電飾で明るく  
彩られ、川の水面にはキラキラとその光が映っている。家族みんな、きれい  
な景色を見ながら楽しく食事をしていたのかな。そう思いながら写真を見てい  
ると、私の夏休みの思い出と重なり始めた。お盆になると親戚が祖父母の家に  
集まり、ご先祖様を迎えながらごちそうを食べる。おしゃべりしたり笑ったり、  
私が大好きな時間。私と同じだったのだな……そう思った瞬間、知らない家族  
の時間が自分のことのように切なく重なり、悲しい気持ちでいっぱいになった。  
幸せな日常に無理やり入り込み、ためらいもなく破壊してしまうのが戦争なの  
だと改めて思った。

私は今までただ、戦争はむごくて、二度と繰り返してはいけないものと思  
うだけで、自分から戦争について、知ろうとしてこなかったことに気付いた。半  
年前に見た慰霊塔が別世界のもののように感じたのも、そのせいかもしれない。  
私は、申し訳ないような気持ちでいっぱいになった。母がまた病院に行く時は、  
慰霊塔に手を合わせ、心から平和を願おうと思った。

母にそのことを話すと、母は曾祖父の話をしてくれた。曾祖父も家族を残し  
て、戦地に行っている。仲間がたくさん亡くなったけれど、曾祖父は家族のも  
とに帰ることができたそう。優しい人で母が質問することには何でも答えて  
くれたが、戦争の話だけはしなかった。けれど、病気で入院した時、ベッドに  
寝ていた曾祖父がいきなり、

「すまねえ。すまねえ。助けてあげられなくて。俺ばかり生きちゃった。」

と、叫んだそう。そばにいた家族は、その時、戦争で曾祖父が受けた深い心  
の傷を知ったという。私の姉が生まれた時、曾祖母が、

「じさま。生きていて良かったな。めんこいやしゃこの顔が見られた。」

と言うと、曾祖父は幸せそうな顔をして、

「んだな。」

と、何度もうなずいていたそう。曾祖父は私が生まれる前に亡くなってしまった。私は写真でしか曾祖父のこ  
とを知らないけれど、母の話を聞いて、曾祖父があの時代を一生懸命生きてく  
れたから、私まで命が続いていることを知った。戦争は他人ごとでも、どこか  
遠い別世界のことでもなく、今を生きる私へとずっとつながっていたのだ。今  
度は私が未来へつなげる番だ！

私は、たくさんさんの命を奪った太平洋戦争について勉強しようと思う。知ろう  
と思う。戦争について、自分の考えや思いをもち、そしていつか平和の大切さ  
を自分なりの方法で未来へ伝えられる人になりたい。二度と同じ間違いを繰り  
返さないために。

## 審査員長のコメント

戦争を直接経験している世代は少なくなり、記憶の継承が難しくなっています。  
そんな中、街中の戦争の記録に気付くだけでなく、そこから、戦争のこと、戦争に  
関わった人の思いを豊かに想像し、平和の大切さについてしっかり考えています。



東京都教育委員会賞



板橋区立志村第四中学校 三年

菊池香帆

好きと伝えられる社会へ

「同性が好きなんておかしいだろ。」

頭を鈍器で殴られたような衝撃が走りまわりました。何も言い返さない私を見てま  
ずいと思ったのでしょうか。

「今はいろんな人がいるよな。まあ、俺は絶対無理だけど。」

と、その人は焦ったように付け足しました。

周りは笑っていました。

私は少しも笑えませんでした。

自分がパンセクシャルかもしれない、と気付いたのは中学一年生の秋でした。何事にも一生懸命で、学校生活にも手を抜かず、誰にでも優しく接する。それを当たり前のように行える、すばらしい女性を何ヶ月も見えてきました。すると、胸の奥が熱くなるような不思議な感覚に襲われました。

ただの憧れ。初めはそう思っていました。しかし、学校にいても家にいても常にその人のことを考えてしまいます。あの人に会いたい。あの人の笑顔を見たい。この時に、これは憧れではなく恋だと気付きました。

異性に恋をしたことはありませんが、同性に恋をするのは初めてでした。自分の性的指向や性自認がわからなくなり調べた結果、パンセクシャルである可能性が高い、とわかりました。

パンセクシャルとは、男性、女性、どちらの性にも分類されない人、あらゆる全ての人たちに隔たりなく恋をする人を指します。つまり相手の性別を気にせず、その人自体を好きになれるということです。何も後ろめたいことはありません。むしろ、性別という壁に囚われずに人を好きになれることに、嬉しさすら湧いてきました。そのため自分がパンセクシャルということはあまり隠さ

ず、聞かれたらそう答えていました。

多くの人は、私がパンセクシャルだということを受け入れてくれました。ですが、先ほどのように心ない言葉を投げかけられたり、

「私は普通だからやめてね。」  
と言われたこともありました。

私は「普通」だから。その人がどういう意図で言ったのかはわかりませんが、けれど、もし「好きな人が異性」＝「普通」なら、私は「異常」になるのでしょうか。

自分が異常だと思ったことは一度もありません。確かに少数派だとは感じますが、それでも、ただ人を好きになり、たまたまその人が同性だっただけです。その人に抱く感情は周りと同じです。決して異常ではありません。

好きな人がいる。素晴らしいことではありませんか。その人が異性でなくても。自分が好きになる人の性別を周りが決めるべきではありません。

今では、日本人の約十人に一人が、生まれ持った体の性別と性自認が一致する異性愛者以外の人だと言われています。分かりやすく言うと、約十人に一人が性的マイノリティだということです。これは大体左利きの人と同じ割合になります。

左利きの人とは右利きの人と比べると少数派ですが、今、左利きの人を見て異常だと思う人はそうそういないでしょう。私たちを、少数派だからといって差別するのは間違っています。

性的指向や性自認は、白と黒というように対極に分かれるものではありません。その間にグレーがあり、その中にも白に近いグレーや黒に近いグレーがあります。グラデーションのように無数に存在するものなのです。はっきりと分かれる必要はなく、はっきりと分ける必要もありません。少数派も多数派も、グラデーションの中ではみんな等しく、平等な存在です。

あなたが誰を好きであっても、私はあなたを否定しません。だから、あなたも私を否定しないでほしいのです。互いの性的指向や性自認を理解して、尊重しあいましょう。それが、誰もが好きな人に好きと伝えられる社会を創る、一番の近道です。

「好きです。」  
いつか、伝えられますように。

審査員長のコメント

性的マイノリティの人権の問題は、大きな課題となっています。勇気のある発表だったと思いますが、貴重な発信でした。「異常」ということと「少数派」ということは違うんだという主張が自身の経験と絡み合って、説得力がありました。

## 優良賞



東京都立葛飾ろう学校 三年

## 大澤 美輝

## 差別の無い社会を

今の社会は、どうして差別があるのだろうか。

差別に関するニュースを最近よく見かける。黒人と白人の差別や国同士の戦争、障がい者への差別などがよく話題になっている。

差別された人はどう思っているのだろうか。差別した人は何を考えて差別的発言をしたのだろうか、と考える時間が増えた。

差別の中でも私が一番ショックを受けたのは、障がい者への差別だ。

何故なら、私自身、聴覚障がいと発達障がいを持っているからだ。私は生まれつき耳が聞こえなくて、発達障がいも小さい時から今でも続いている。

私の家族はデフファミリーだ。デフとは、耳が聞こえない人という意味を表している。デフファミリーとは、耳が聞こえない家族という意味である。私は聞こえない両親と共に今まで過ごしてきた。

その度に、辛い事や苦しかった事、コンプレックスになった日々もあった。

小学五年生の時に、近所の区民センターで幼なじみの友達と一緒に遊んでいた時、他の子が私を見て何か言っていた。私は身ぶりで「耳が聞こえないので筆談してね。」と伝えた。

すると、その子は突然口を大きく開けて悪口を言ってどこかへ去っていった。私は、この時初めて差別されたショックを味わった。私はすぐに家に帰って自分の部屋ですっと泣いた。どうして悪口を言われたのだろう。一人で泣きながら、ふと思った。悪口を言われる前に

「耳が聞こえない。」

と伝えた時に、男の子がうすら笑いをしていた。その後に悪口を言われた。という事は、耳が聞こえないから馬鹿にされたのだろうか、と考えた。

私は、常に耳が聞こえない世界で過ごしている。だから、私はまだ健聴者のことを何も知らない。ろうの世界と健聴者の世界が違うことを初めて知ったのは、小学五年生の、あの出来事だった。

その時、差別のある社会をとっても痛感した。その時は、私は障がい者だから仕方ないと思い込んでいた。でも、障がい者だからといってあきらめるのではなく、障がい者を理解してもらうために、どうすればいいのかを考えて自分から行動するべきだと思うようになった。

障がい者を理解してもらうためにサークルなどを作り、活動を広げていきたい。その為には、障がい者にとって何が辛いのかなどを理解し、どう支えてあげたいのかを皆と一緒に考えたい。一人一人が障がい者を深く理解してもらえるよう、がんばりたい。そうすると、差別が少しでも減っていくだろう。

そして、いつか障がい者の差別や色々な事に対する差別が無い社会になって欲しいと願っている。誰もが平等に暮らせる社会を、皆と一緒に作って行きたい。

## 審査員長のコメント

差別を受けた辛い経験を乗り越えて、障がい者に対する理解が広がるように、自身の経験を発信し、他の人も支えていこうとしています。その熱意と社会に対する訴えが、手話による発表からよく伝わってきました。

優良賞



大田区立大森第八中学校 三年

鹿島 靖媛

一人一つの命

皆さんは「命」ということについてどう思っていますか。命とはどういうものなのかをじっくりと考えたことはありませんか。辞書を引いてみると、「生きること、何より大切に頼りになるもの」と書いてあります。では、なぜ大切な命を自ら落としてしまう人がいるのでしょうか。いわゆる「自殺」です。

厚生労働省がまとめた二〇二〇年度版の「自殺対策白書」によると、全体的に自殺率は年々下がってきています。自殺者数も十年連続で減少し、二〇一九年は過去最少の二百六十九人でした。しかし、二十歳未満の自殺率はだんだん上がっています。自殺者数も二〇一八年に比べ、約十パーセント増加の六百五十九人で、二〇〇〇年以降では最多となりました。国の未来や希望である青少年がこの世から去っていきます。どうして、「死」という道を選んでしまったのでしょうか。

厚生労働省の「自殺対策白書」によれば、小中高生の自殺の原因や動機として、「学校問題」が大きな割合を占めています。厚生労働省は若者に対する自殺対策として、二〇一八年からSNSでの相談事業を始め、二〇一八年度には延べ二万二千七百二十五件の相談がありました。相談者は未成年が約四十四パーセントで最も多いのです。男女比は、女子が約九十二パーセントでした。相談内容では「メンタル不調」が一番多いということです。

例えば、私の身の回りにも自殺を考えるほど悩んでいる人がいます。その人は、人間関係を築くのがあまり得意ではありませんでした。その人は、自分は何もしていないのに、周りから「あの子むかつく」などと悪口を言われ、仲間外れにされてしまいました。しかし、その時私は何もできませんでした。一人で苦しみ、学校に来なくなりました。その時私が「大丈夫？」と声をかけてあ

げれば、結果は変わっていたのかもしれませんが。私の周りだけでなく、みんなの周りにもそう悩んでいる人はいるでしょう。このように、周りの何気ない一言や動作によって傷ついてしまう人も多すぎます。そして、もしかしたら「死」という選択肢を選んでしまいます。

「未成年者の自殺率の上昇」という深刻な課題を抱えているのは、日本だけではありません。全世界にわたる地球規模な課題だと私は考えています。

例えば、私が十二歳まで住んでいた中国です。中国の「中国児童自殺報告」という資料によれば、中国では二〇二〇年七月までの時点で、毎年約十万人の未成年が自殺により死亡していることが明らかになりました。毎分に約二人の青少年が自殺を試み、その中で五人に一人の方が亡くなっています。上海での調査によると、約二十四パーセントの小中学生が「死にたい」と思ったことがあるそうです。そして、「死にたい」と真剣に考えたことがある人は約十五パーセントで、約六パーセントの人が実際に自殺を図ったことがあるそうです。

皆さんは、こんな衝撃的な数値を聞いた時どう思いましたか。私は悲しみや言葉に表現できない複雑な気持ちに包まれています。私とほぼ年の変わらない子たちが苦しんで、命を落としています。自分には何ができるのだろうかと考えてしまいます。もし身近に苦しんでいる人がいたら「大丈夫？」とすごく簡単な一言でもその人を救うことができるかもしれません。また、その言葉が届かないほど苦しんでいる人がいたら、そばに一緒にいてあげることです。軽減することができなくてもいいです。とにかく、苦しんでいる人がいたら、どんな方法でも、助けてあげてください。それでも、助からない命があるかもしれません。しかし、もしかしたら、あなたもいつか逆の立場でその人に救われる可能性もあるのです。もし、「つらい」「もう無理」と思う時があったら、信頼できる人に相談をしましょう。どんな人でも生きていく意味や価値があります。「命」とは、一度失ったら二度と取り戻すことのできないものです。一人、一つの命しか持っていません。与えられた命を、何よりも大切なものとして、自分の命を大事にし、そして、他人の命も大事にしましょう。

コロナ禍の今、命の大切さがより深く感じられます。私のこのスピーチによって、皆さんの意識が少しでも高まり、一人、一つしかない命の大切さを、今一度考えてみることを望みます。

審査員長のコメント

残念ながら、今日も痛ましい子どもの「自殺」のニュースが流れています。発表から、子どもの自殺が世界的な問題になっていることが改めて分かりました。データに基づく説得力のある発表は、国を超えた対策の重要性を訴えています。

## 優良賞



國學院大學久我山中学校 三年

## 佐藤 瑛太郎

## 「勇気の一步」

みなさんは、自分で勇気の一步を踏み出したことがありますか。その一步を踏み出したきっかけはなんでもいいです。落し物を学校の先生や交番に届けたら、友達が怪我をしてみたい、一緒に保健室へ付き添いをしてあげたり、電車でお年寄りや体の不自由な方に席をゆずったり……。私達の日常には、様々な「勇気の一步」があり、その一步一步が大人の階段を上る大切な一步なのです。

あの青く澄み渡った夏の空の下、私は初めての「勇気の一步」を踏み出したのです。ある駅の改札口に、目の不自由な五十代くらいの男性が、誰に声をかけるでもなく、しかしおろおろとした様子で立っていました。私は学校に遅刻してしまおうと思いついて、その男性に声を掛けずに通り過ぎようと考えました。しかしその時、時間が止まってしまったかと思われ程に長いその一瞬間で、頭の中のもう一人の私が話しかけてきたのです。

「あの男性の横を通り過ぎてしまおうような大人達と一緒にいたいのか？」その瞬間、私は

「見て見ぬふりをするような人間には将来なりたくない」

そう思いました。そこで私は改札を通過するはずだったその一步を「勇気の一步」へと変えました。しかし、初めて障害を持つ人に接したので、何をすればいいかわかりませんでした。そこで、自分が相手の立場になった時のことを考え、その結果、私は男性に声を掛けました。

「どうされましたか。」

男性は、

「一番線のホームへ行きたいのですが、この駅を使うのは初めてで……。ごめ

んなさいね。」

そうおっしゃったのです。私は何とも言えない悔しさで胸がいっぱいになりました。男性は悪くないのに、「ごめんさい」と謝らなければならない環境に、表現できない程の悔しさを覚えました。そんなもやもやした気持ちをだき抱えながら、私は一番線へと向かいました。ここで私は雷に打たれたかのような衝撃を覚えました。なんと、一番線には、エレベーターもエスカレーターもなく、階段しかなかったのです。私は男性の腕を私の肩に回し、一歩ずつゆっくりと下っていききました。一歩ずつホームに近づぐ度に、私の背中からは冷汗が湧き水のように出て来ました。

「油断すると大変なことになってしまうぞ。」

そう言い聞かせ、手に汗をにぎりながらも遂に一番線ホームへと辿り着くことが出来ました。階段を下り切った私は、まるで何か重大な事を成し遂げた後の達成感と安堵のため息がまじったような感覚に襲われました。しかし、次の瞬間その確かな勇気の一步は報われました。

「ありがとう」

たった五文字、だけれども心の底から出て来た男性の「声」は、大人の階段を登り始めた私の背中をしっかりと押してくれたのです。私は今までこんなにも気持ちのいい「ありがとう」に出会ったことがありませんでした。「情けは人の為ならず」なのかもしれません。

現代人の多くは時間に縛られていると思います。自分の趣味をする時間が学校や仕事でなくなってしまうたり、家族と接する時間でさえも奪われていると思います。しかし今、日本では働き方改革やコロナ禍の自粛期間によって時間に余裕が出来つつあります。この機会に自分の時間をつくったり、他の人と同じ時を共有してみるのもいいかもしれません。また、ボランティアなどの人と関わるコミュニケーションに参加してみるのもいいかもしれません。思い掛けない出会いによって、あなたも「勇気の一步」を踏み出すことができるかもしれません。私は、今まで積み上げて来た「勇気の一步」が投げ所とできる自己を確立していくと考えています。正に、「勇気の一步」は自己共に成長することのできるものであり、現代を生きる人に必要なものではないでしょうか。

## 審査員長のコメント

障がいのある人に接する時の戸惑いと、それを乗り越えて自身が変化していく様子がよく伝わってきました。コロナ禍の時代だからこそ、ゆとりをもって人と接していきたいという発信は、特に新鮮な主張であったと思います。

優良賞



立川市立立川第二中学校 三年

## 下津浦美結

### 矛盾する「正しい」

私は「大人」が嫌いだ。けれど、早く大人になりたいと思っている。この矛盾した二つの思いに、私はずっと悩んできた。

私達「子ども」は日頃から「大人の言う事は聞くべきだ」「大人は敬うべきだ」と、学校の先生や親から言われている。だから私にとって、大人という存在は絶対的に「正しい」ものであった。だが私は中学校に入学した頃から、その「正しい」に大きな矛盾と疑問を覚えるようになった。

街でよく見かける大人の姿はこうだ。赤信号なのに横断歩道を渡る。スマホを見ながら自転車に乗る。たばこのポイ捨てをする。電車の優先席に平然と座る。私達が大人から教わる「正しい」姿。それを壊すのはいつだって「大人」だ。私にはその矛盾が許せなかった。私達が教わり、守ろうとしている「正しい」事は、「大人」にとっては簡単に破ってもいい軽いものなのかとショックだった。少しずつ絶対であった大人の存在が揺らいでいき、「大人」が嫌いになった。そして、これまで信じてきた「正しい」という事の意味さえ分からなくなった。

私達は世の中ではまだどうしようもなく「子ども」だ。大人から行動の制限を受けたり、我慢を求められる時に説明される理由にも「まだ子どもだから」と言われる事も多い。だから私の中で「子ども」という言葉から早く抜け出したい、早く大人になりたいという思いが強くなっていった。「大人」への不信感をもちながらも、早く大人になりたいと思う矛盾。私は葛藤していた。

そんな悩みの中にいた私に、将来の夢ができた。きっかけは私の小学生の頃

の担任の先生からの言葉だった。

昨年の冬、私は先生に手紙を書いた。内容は、近況報告と「大人ならどんな人でも敬うべきか」という悩みについてだ。先生からの答えは「敬う必要はない」という、これまで教わってきた「正しい」の全く逆だった。その後「世の中には自分からするとおかしいと思う人がたくさんいる。その人達とどう接するべきか、自分なりに考えてみて欲しい」という内容が続いた。大人の言う「正しい」に矛盾を感じていた私に、先生は初めて真っすぐに否定してくれた。心がスッと軽くなった。そして何より、先生が私のことを「子ども」としてでなく、一人の人として見てくれた気がして、それがとても嬉しく心の支えになった。

私の将来の夢は教師だ。今の学校教育では、大人の教える「正しい」について、子どもが深く考える機会があまりもたれていない。ゆえに子どもは教えられた通りに受け取り、それ以外の考えを知る事は難しい。だが前にも述べたように、社会は矛盾でいっぱいだ。私は大人になったら教師という職業を通して、私と同じように、悩んでいる子どもの助けになりたい。そして、子ども達に世の中の矛盾を正しく教えられるようにしたいと思う。

私にはまだ「正しい」が一体何なのか、矛盾をどう解決していけばいいのか分からない。だが、それを悩みながら考えていくことが、大人へと成長するという事だと思う。

今、世界は新型コロナウイルス感染拡大の真ただ中にある。これまでの常識が覆されて新しい生活様式に合う、新たな考え方が生み出されようとしている。だからこそ、次世代を背負っていく私達子どもも真剣に考え、積極的に社会に参加していく事が求められるのではないだろうか。そして常識が変わるといふ事は「正しい」にも変化が必要だろう。変わっていく常識。「正しい」。私はそれらに敏感に反応し、できることを探していきたい。子どもにできる事は少ないかもしれない。けれど諦めず、自分の考えた事に信念をもって主張していきたい。今、そうして頑張る事が将来につながっていると信じて、大人への道を一步一步、歩んでいこうと思う。

#### 審査員長のコメント

コロナ禍の中で、新たな生き方・考え方が生まれつつあることを肯定的に捉え、これからの時代の「正しい」をしっかりと考えていこうとする意志が伝わってきました。そこへ導いてくれた先生とのエピソードも印象的でした。

## 優良賞



葛飾区立金町中学校 一年

## 住吉拓己

## 2030年に向かって

「それぞれ一人一人が課題や目標に向かって考え、思いやりの心をもって行動する。自分が幸せになることで、人間だけでなく地球全体が幸せになり、そこから持続可能な世界がつくられていく。」

これは私がこの春、入学式で聞いた校長先生のスピーチです。この言葉を聞いた時、私は心に電気が走ったように感じ、深い感銘を受けました。私自身も、生きものや植物、地球に住んでいる皆が安心できる環境をつくることで、世界中が笑顔で溢れていくと思っていたからです。今まで心の中で漠然と思いついてきたことが、はっきりとした形になり、私の行動目標の指針となったのです。中学校生活をより有意義なものにする為に、校長先生の言葉を胸に、自分の思いを行動に移す決意をしました。

2015年9月に国連サミットで採択されたSDGsを、2030年までに達成するために17の大きな目標が掲げられ、世界各国で色々な取り組みが行われています。貧困、紛争、気候変動、感染症、資源の枯渇……それらの中から、自分自身の身近な問題を取り上げ、自分なりに行動に移しました。

私が行っている活動の一つを紹介します。まず私の考えに賛同してくれる大人たちのサポートの下、仲間を募り、子供が主体で活動できるサークルを立ち上げました。その中で、SDGsの目標12「つくる責任つかう責任」をサイズアウトして着れなくなった服から、ゴミと環境問題を考えていく、アップサイクルプロジェクトを始めました。日々成長する子供のサイズアウトした服や、汚れや破れがある服を使って、アップサ

イクル品を考えました。日本の伝統的な布ぞうりや風呂敷は、とても素敵で実用的な作品となりました。また布アート作品の一つとして、布リースが簡単に作成できるキットを考案しました。それらをコロナ禍で交流がでなくなってしまうという高齢者施設の方々へプレゼントし、とても喜ばれました。

毎日身につけている洋服だからこそ、その生産の背景をより知る必要があると感じ、映画「ザ・トゥルーコスト」の上映会に参加しました。今まで知らなかったファッション業界を取り巻く悲惨な現状を目の当たりにしました。低賃金で働くことを強いられている発展途上国の人々。服をつくることで進んでいく環境汚染。それらの問題に目を背け、不要な大量生産大量消費を繰り返す先進国の人々。誰かの犠牲の上に成り立つ産業があつてはいけないと強く思いました。この問題は自分たちだけでは解決の糸口が見つかからないと感じ、服飾の企業と繋がれば、これまで以上にできることが広がるのではないかと考えました。それまでのサークル活動から縁が繋がりが、サーキュラー・ファッションサービス事業、フェアトレード事業を行っている会社から賛同を得ることができたのです。大人に交じって、私たちも一緒にこなしていくプロジェクトも生まれることが決まりました。私達のアイデアと企業が共に探求しながら進んでいきます。地球の未来のための、サステイナブルな洋服作りは、新たな驚きをつくりだしていく活動になるでしょう。私が起こした小さな行動が、たくさんの人やモノと繋がりが、広がっていく事をとても嬉しく思っています。

私は今はまだ中学生ですが、2030年には立派な大人になっています。今の大人たちだけでなく、近い将来大人になる私たちも、今、自分達自身の明るい未来のために、出来る事は何かを考え、行動を始めてみませんか？

「考え、思いやりの心を持って行動する。自分が幸せになることで、地球全体も幸せになる。そこから持続可能な世界がつくられていく。」ここに込められた気持ちを大切にしながら、私はこれからも行動を続けていきたいと思っています。

2030年の目標に向かって、大人も子供も、みんなが集まれば、何かが変わる、何かができる！ We can do it!

## 審査員長のコメント

社会的にますます注目されるSDGs。これについて、実際に具体的な活動を行っていることが分かりました。そして、その内容がよく工夫されていることに感心しました。アイデアと実践力に富んだ姿に希望を感じます。

優良賞



世田谷区立芦花中学校 三年

乳井美桜

地球のためにできること

「タイで再び生き生き」、「絶滅危惧種のジュゴン大群・ウミガメ産卵」という新聞記事が目にとまりました。なぜなら、ジュゴンが海で気持ちよさそうに泳ぐ写真があったからです。その記事を読んでもみると、世界的に人気のビーチリゾートがあるタイで、絶滅しそうな海洋生物のジュゴンの大群やウミガメの産卵が相次いで確認されたそうです。絶滅危惧種のジュゴンやウミガメがどうして生き生きとした姿を見せられたかという点、新型コロナウイルスの感染拡大による観光客激減でゴミが減るなどして、動物の住みやすい環境になったことが理由でした。人間はロックダウンで行動を制限されていますが、海洋生物にとっては私たちがいないことで完全に自由な時間を満喫しているのです。

今まで多くの国が何年も話し合っていて環境保護活動を行ってききましたが、なかなか成果が出ませんでした。しかし、コロナ対策として人々がたった三か月外出を控えただけで地球環境が良くなっていることに私は驚きました。新型コロナウイルス感染拡大による経済活動の停止で二〇二〇年の温暖化ガスの減少が過去最大となるデータのデータもあります。実際、インドでも大気汚染の改善により、都市部でヒマラヤ山脈が見えるなどの現象も起きています。このまま続ければ環境問題は確実に解決していきますが、経済や便利さのことを考えるとできません。ですから、これからの環境のことも配慮しながらこれから人間は発展していかねばならないのです。そして、今回の外出を控えることは、世界各国で行われているということがウイルスの抑制だけでなく、自然環境の改善の点でも意味があったのではないかと思いました。それは、気候変動や環境などの問題がとて深刻で各国が足並みをそろえ、強調して取り組む必

要があるからです。

SDGsとは「持続可能な開発目標」と呼ばれる国連加盟国百九十三か国が全会一致で採択した二〇一五年から二〇三〇年にかけて達成するための行動計画です。今、SDGsを達成するために大企業が主に取り組んでいます。例えば、調達先も含めて温暖化ガスの廃棄削減に取り組んだり、必要なエネルギーを再生可能エネルギーで賄ったりする動きが広がっています。また、ヨーロッパでは環境にやさしい製品やサービスかどうかを色分けする分類体系(タクソノミー)づくりが進んでいます。私が中一のときに参加した世田谷区立中学校生徒会サミットが企画した「14歳の成人式」でも「持続可能な社会の実現のために踏み出す一歩」をテーマに研究発表していました。未来の地球のために中学生としてできることは何か考えるきっかけになりました。こうやって課題の解決策を考え抜き議論することは世界に視野を広げる貴重な機会になるので、とても大切なことだと思います。

SDGsの取り組みと聞くと、何となく国や自治体、経済界、会社のような「組織単位」の取り組みのように思いがちです。しかし、今の世界を作っているのは私たち人間一人ひとりです。環境を壊しているのも私たち人間です。新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、外出制限や生産活動が縮小・停止されたことで一時的に地球環境の改善に繋がりました。このことから、私たちの活動と地球環境は切っても切れない関係にあることがよく分かります。

今、私達は地球を犠牲にしてあたり前のように手に入れてきた豊かで便利な生活を見直す時期にきています。現在「地球温暖化・水食糧問題・環境汚染」という三つの危機が互いに深く関係しあっているとされており、最近の科学では「このまま問題を放置した場合あと十年で地球は限界に達する」と警告しています。私たち人間の活動を受けとめきれなくなった地球のために、私たちはこれからの十年を過ごさなくてははいけません。手遅れになる前にまず環境保全への個人の意識を変え、それぞれができることを今すぐに行動し始めることが大切です。人生百年時代と言われる平均寿命がいくら延びたとしても、美しい自然やたくさんの動植物のいない地球では、長生きする意味がありません。私は、地球に存在する全ての生き物が生き生きとできる環境を取り戻し守ることが、地球環境を悪化させ続けてきた私たち人間の責務であると考えます。

審査員長のコメント

新型コロナウイルス感染症の拡大が、地球規模の環境問題の改善につながっているという興味深い現象。これを皮肉なことと捉えるのではなく、私たち一人一人の取組が解決につながるのだという希望として受け止めている点に共感しました。

## 優良賞



立川市立立川第八中学校 三年

## 吉田 琉生

## 本当のバリアフリー

中学二年の新学期。こんなスタート、誰も想像していません。学校に行けない、外に出られない、友達に会えない、一緒に遊べない日々。や々と学校が再開し、友達と会えた・遊べた事、いままでは当たり前前の事でした。

そんな喜びから数日後、自らの不注意から……まさかの右足首の骨折。や々と動けた喜びも一転、人生初の松葉杖生活に。日々の生活でも目にする松葉杖ですが、実際にやってみると、力の入れ方やバランスのとり方など決して簡単ではありませんでした。そして松葉杖生活で、他にも色々と不便だと感じた事があります。いつも何度も通っている通学路。いつもと変わらない通学路のはずですが、いつもと違うのです。僕を苦しめたのは、道路の段差や傾斜。普段は決して気にならない、段差や傾斜とすら感じていない所でも、いざ松葉杖を使つて歩行すると、難所に一変。ちょっとした段差を上げるのも、松葉杖にうまく力を加えられず、身体を持ち上げるのに一苦労。雨の日の道路の傾斜は、滑らないかと不安でした。そして、扉も難所。特に引き戸は松葉杖を持ちながら、なかなか力が入らなく、いつもは軽い扉が、重く非常に大きい扉に感じました。普段、素通りしている、視界にすら入っていない手すりに、何度も助けられました。

授業で学んだバリアフリー。意味合いや必要性など、学んだつもりでした。しかし、今回、自らの松葉杖生活で、改めて必要性を実感させられました。街の中・建物や駅や学校など数多くの施設には、段差をなくしたり、手すりやエレベーター設置などバリアフリー化が進んでいます。たまに利用する公共のバスにもノンステップバスなどが運行されています。確かに、昔に比べたらバリアフリー化は進んでいると思います。ただし、それは、まだまだ一握りに過ぎないのかもしれない。通学路も決してバリアフリー化がされていない訳ではありません。しかし、難所は存在しました。

僕が、松葉杖生活で遭遇した数々の難所。自らの努力で、全てをクリアできた訳では決してありません。この難所を支え、助けてくれたのが友達。友達が、教室移動の際、教科書を持ってくれたり、学校の行き帰り、重いかばんを背負ってくれたり、身体を支えてくれたり、本当に色々と助けてくれました。雨の日は、傘も差してくれ、おかげで濡れずに帰宅できた僕に対し、雨に濡れていた友達の背中。あの姿は忘れません。

当たり前の事が、当たり前でなくなった時、初めて感じ、気づくことがあります。これから進む高齢化社会。技術の進歩と共にバリアフリー化がより進み、みんなが暮らしやすいより良い街になっていくでしょう。そして、僕たちも、そんな世の中にしていかねければいけないと思います。しかし、もっと大事な事は、人と人との助け合い。これこそが、本当のバリアフリーだと心から学びました。

## 審査員長のコメント

自身の怪我をした経験を基に、バリアフリーについての認識が深まったといった様子が分かりやすく伝わりました。物的なバリアフリーだけではなく、人と人との助け合いが必要だという主張には説得力がありました。



## 奨励賞

吉祥女子中学校 三年

## 伊藤瑛泉

## わたしは諦めない

冗談じゃない、なんで私が。コロナ禍でただでさえ我慢我慢の日常で辛いのに更に追い打ち。なんでなんで……。

それは忘れもしない今年三月七日の夕方のことです。救急車で運ばれた大病院の病室でほんやりとお医者さん二人のお話を聞いていました。中二の学年末試験の真つ最中にまさか私が「不治の病」を宣告されるなんて思いさえしませんでした。ただそれまでの期間一か月くらい、とても体が重く登下校ですら疲労感を感じていたので、きちんと病名がついて治療が始まることにほっとした自分もいました。しかし治療を頑張れば治る、治せる、そういう病気ではないという現実を、頭で理解はしてもやはり心はなかなか追いつかず、先生の言葉に涙も出ませんでした。

私の病気は発症率が十万人に一〜二人とのことですが、自分で毎日きちんと注射し、体調をコントロールできれば普通の生活ができます。食べるのが何よりも大好きな私は食事制限等がないことには安堵しましたが、これからの人生ずっと注射とのお付き合い、合併症発症の恐怖と隣り合わせで生きていかなくてはいけないかと思うと不安は尽きませんでした。

しかし入院中、沢山のサポートが受けられ、驚くと同時に感動しました。まがず生まれて初めて救急車に乗った時も、救命救急隊の方々の声かけが本当に優しくかったです。意識朦朧としている時でしたが、救急士さんの手がとても頼もしく感じたのを覚えています。入院中も主治医の先生をはじめ昼夜交代で来てくれる看護師、薬剤師、ソーシャルワーカー、栄養士、清掃の方々……病院内だけでも多彩な職業があり、普段は接することのない職業の方たちの仕事ぶり

の一端を見るにつれ、社会の中で「人の役に立つ」ということを初めて意識した気がします。

またキャリア教育のようなレクチャーをしてくださった看護師さんもらっしゃいました。今は公的医療助成があるが成人したら高額な医療費を自分で払っていかなくてはいけないこと、そのためにも手に職を持つといよいよアドバイスも頂きました。病気が理由でどうしてもなれない職業もあるとのことでしたが、お話を聞いて「制限がある」よりむしろ「選択肢が広がった」ように感じています。私はこの先どんな職業につくか分かりません。小学生の頃から文房具デザイナーになりたいと思ってきましたが、「社会の役に立つ」というキーワードに惹かれ、最近は医療の世界も興味を湧いてきました。つまり私は入院を機に、今まで知らなかった世界を初めて知ることができたのです。

同じ病気を持つ人同士の「患者の会」があるのも初めて知りました。全国の患者の会を紹介するガイドブックには聞いたこともないような難病がたくさん記載されていました。そんなにも沢山の方々がいろいろな難病で苦しみ、そして必死な思いで生きていることを今回初めて知りました。そして患者の会で情報交換したり、前向きに生きるための様々なイベントが行われたりしていることも。

私には残念ながら同じ病気の友達がまだ一人もいません。私が入会した患者の会では小中高生を対象に毎年サマーキャンプを催行しているようなのですが、コロナ禍で今夏は中止。代わりにオンラインキャンプがあるそうで、同じ年頃の友達と出会えるかもと今から楽しみにしているところです。

まだ自分の病気がわかって四か月。学校の先生や友達はじめ周りの方々のサポートを受け、この病気と一生付き合っていく覚悟がようやくできてきました。今は医学分野の発展がめざましく、私の病の根治の可能性も大いにあるそうです。日々研究してくださっている方々に感謝し、いつか自分も自分と同じ病を持つ「後輩」に勇気を与えられるような大人になりたいと思っています。

コロナ禍で酷いこと、腹立たしいこと、辛いこと、苦しいこと日々たくさん見聞きしています。でも私は病気になって、人間の持つ優しさ、勇気、そして叡智を確かに感じています。病気だからといって私は諦めません。病気をハンディキャップとしてではなく私の持つ「個性」の一つとして社会に出ていきたいです。

## 奨励賞

東京都立武蔵高等学校附属中学校 三年

## 大鹿乃愛

## 自尊の心を大切に

ある日、友人が突然泣きながら友情関係について相談してきたら、人間なら誰でも心配になるし、助けたいと思うだろう。SOSを出している人がいたら、人間なら誰しも「助けてあげたい」「少しでも支えになりたい」と思うだろう。これは人間が「感情」を持っているから起こることだ。感情があるからこそ誰かの力になろうと手を差し伸べることができる。これは一見、非常に単純なことのように思えるが、人間にしかできないとても美しいことだと私は考えている。しかし、美しさだけでは説明できないところがある。

例えば、困ったり悩んだりした時に人に相談する。相談した本人は本当に困っているし、心も弱った状態であるが、悩みを他人に話せてはいるし、話せる相手と勇気があるという点は強みだと思う。その一方で、いつも元気で弱音を吐かない人はどうだろう。一般的にそういう人たちは「メンタルが強い」などと言われるが果たして本当にそうなのか。

弱音を吐かない人の中には本当にどんな事にも挫けない人もいるが、そうでない人も多いと思う。悩みや不安を見せず、SOSを完全に隠している人だ。実際私もその一人だったし、私の友達にも似た人がいた。人間は感情を持っていると同時にそれを押し殺すこともできる動物だ。しかし、ずっと悩みや不安を押し殺している人と限界が来て心身共に苦しくなる。だから少しでも、今そういった状況にある人を救いたくてこれを書く。

一つは私の友人の話である。その友人は明るく、面白くて誰とでも仲良くできる元気な人で、嫌な事があっても笑って流せるようないわゆる「メンタルが強そう」な人だった。私もそう思っていた。仲良くなって二年程経ったとき、少し疲れたような雰囲気が続いた。最初は気のせいと思っていたが長い間その

様子だったため話を聞くと、実は心の中でずっと悩んでいたことがあり、二人きりの時に全てを打ち明けてくれた。その友人は表面上には全く出さず、決して皆に悟られないように堪えていて、それが積み重なり、精神的なダメージを負っていた。私はもっと早く気づいてあげれば良かったと思った。また、気を遣わず全て話してくれて良いのに、とも思った。毎日一緒にいてもその人がSOSを出さない限り、その人の抱えている辛さに気づくのは難しいと実感した。

二つ目は私自身の話である。私は小学生くらいの時から、自分は普通よりメンタルが強いほうだと思っていたし、実際、嫌な事があっても好きな音楽を聴けば忘れることができた。きつと周りからもそう思われているだろうと感じていて、そんな自分が少し誇らしかったので人前では落ち込んだところは見せたくなかつたし、嫌な事も気にしないようにしていた。それでも中学生となると悩むことも増え、そんな時は「深く考えすぎだ」「どうせ大した事ない」と思うようにしていた。だが、そのように言い聞かせていたある日、大好きな音楽を聴いても心を紛らわすことができず、寝込んだことがあった。学校では平静を装っていたが、部活動の友達が声をかけてくれ、全て話を聞いてくれた。一度話し始めると止まらず、そこで初めて、自分は強がっていたと気づいた。勝手に「いつもより沈んだ雰囲気であると周りを心配させる」などと考えていた私に「もう少し自分勝手に良い」と言ってくれた友達がいた。その瞬間、今まで溜めこんでいたものが晴れ、気が楽になった。

人間は感情があるからこそ悩む。人間はまた感情を押し殺すこともできる。私自身も打ち明けて初めて、無意識のうちに強がっていたと気づいた。心配させるから、自分は強いから、とSOSを知らぬ間に堪えている人は意外と多いと私は思う。しかし、実際、周囲の人たちは自分の想像よりも自分という存在を受け入れてくれるかもしれないし、押し殺して我慢しても限界があつて苦しくなる。だから、吐き出すべきだと私は思う。むしろ吐き出してほしい。思春期の私たちは色々な事で悩んでばかりだが、どんなに些細なことでも話すだけで何かが変わると思う。もし私の周りで、一人で抱え込んでいる人がいるなら遠慮せず打ち明けてほしいと願う。

これは、話を聞いてくれる人を見つかけようとかそういう話ではない。聞いてくれる人は必ずいるから、もっと自分の存在を尊んで、自分で自分を苦しめないでほしい。周りばかり気にするのではなく、自分自身をより大切にすべきで、もう少し自分勝手に良いと私は思う。そうすれば自分という存在を本当に受け入れてくれる人にも出会えると思う。もう少し自分に素直に、そして自尊の心を大切に生きていくべきである。

## 奨励賞

東京都立桜修館中等教育学校 三年

## 文化の継承

## 佐久間 心愛

私は、もつと色々な世界を見てみたい。

そう思い、世界の文化について調べていくうちに、ふと日本の文化はどのようなものがあつたかを考えました。日本はよく良い文化をもっていると言われるののテレビで見ます。しかし、私はその文化についてきちんと知っているのだろうか？と疑問に思いました。みなさんは、日本の文化と聞いて何を思い浮かべますか。おそらく、多くの人が相撲や歌舞伎、能、茶道、華道、寿司、天ぷらなどを思い浮かべるのではないのでしょうか。私も同じようなものを思い浮かべました。そして、それらを他の国の人たちに伝えられるかどうかを考えた時に、自分は日本の文化について全然知識がなかったという事に気付かされました。相撲や茶道、食文化についてはなんとなく説明できるかもしれない。しかし、歌舞伎や能、華道のことを説明しようとすると、うまく言葉が出てきませんでした。私は外側の世界ばかりに目を向けていましたが、そのことがきっかけでもつと内側の世界、自分たちが住んでいる日本のことについて知らなければいけないと思いました。

私は、お囃子を習っていたことがあります。お囃子とは、笛、大鼓、小鼓、太鼓で謡や能をはやしたてることです。お囃子の中にも色々な種類があるのですが、私は祭囃子という祭りの際に演奏される音楽を習っていました。私は、和太鼓と締太鼓を練習していました。実際に近所の祭りが行われた際に、お神輿を先導しながら演奏したこともあります。その時に、演奏をすることで祭り

が盛り上がりつつあるのを感じ、とても嬉しい気持ちになりました。習っていた当時は、これが日本の伝統文化ということに全く意識していませんでした。しかし、今思い返してみると気付かないうちに日本の伝統文化に触れていたのだなと思いました。このような文化がずっと続いてほしいと思いました。みなさんも意識しないうちに多くの日本文化に触れていると思います。また、自分が思っていたよりも身近にあるのだなと思いました。普段から意識してみることが新たな気付きもあるかもしれないと思いました。

近年、グローバル化が進み、企業が海外に進出したり、SNS等で気軽に海外のトレンドや文化が日本に伝わってきたりしています。日本人が海外に興味をもつと同じように海外の人も日本に興味をもっています。だから、日本人として日本の伝統文化を誇りに思っている他の国の人に伝えられるようになっていきました。もちろん海外に興味を持つのも良いことだと思いますが、その前に自分の国のことについてもつと深く知りたいです。そして、お互いの文化について理解しあえたらいいなと思いました。

日本にはたくさん良い文化があります。しかし、過疎化や少子高齢化の影響により、文化が失われつつある地域もあります。文化を存続させていくためにはどうすればいいのでしょうか。それは、たくさんの人に知ってもらおうことだと思います。今日では、情報を発信することが容易になってきています。色々なツールを活用していけば自分が伝えたいことを世界中の人に向けて発信することができます。だから、まず私たちにできるのは正しい情報を知ることだと思います。実際に体験してみたり、日本の文化の歴史の背景を知ったりすることでより理解が深まり、面白いと思うようになるかもしれません。私はこれから始まる体育の選択授業で剣道を選択しました。剣道について調べてみると、江戸時代後期に始まり、二度も活動禁止の危機があつたことなど、他にも今まで全く知らなかったようなことを知りました。様々な歴史がある剣道の授業を受けるのが楽しみになりました。このように、もつと色々な日本の文化に興味をもって様々な経験をして知識を身に付けていきたいです。そして、日本人として誇りを持ち、多くの人に日本の文化を伝えたいです。

## 奨励賞

東久留米市立南中学校 三年

## 佐々木朋美

## 本が人生に必要な理由

皆さんは、本は人生に必要だと思いますか？テレビやゲームといった娯楽があり、インターネットで世界中の情報を瞬時に得られる今、本など必要ないと思う人もいるかもしれません。しかし私は、これまでもこれからどんな時代にも本は必要とされ続けると思います。

そう思うきっかけになったのは、シリア内戦下の街ダラヤの秘密図書館についての本を読んだことです。

二〇一一年にシリアで内戦が始まりました。アサド政権は平和的なデモを起こす人々を逮捕し殺害して抗議活動を抑え込もうとしました。そして、なおも抵抗を続ける人々の街を破壊し封鎖して閉じ込めたのです。

ダラヤもそうした街のひとつでした。出入りが一切許されなため、物資が不足していきます。食料も水もありません。日常的な空爆で出歩くことさえ危険です。そんな状況なのに、街中から本を救い出して秘密の図書館を造った青年たちがいました。やがてたくさんの人が本と仲間を求めて秘密図書館に集うようになりました。

なぜ人々は危険を冒してまで、腹の足しにもならない本を求めたのでしょうか。いつ死んでしまうかもしれないときに、人は本など読むことができるのでしょうか。

答えはイエスでした。むしろ、辛い時だからこそ人は本を読むのです。

図書館を創設した青年たちの一人がこう言いました。

「体が食べ物を必要とするように、魂には本が必要なんです。」

私もその通りだと思います。いくら満腹のどが潤っていても心の健康なしには体の健康ありません。心にも栄養が必要なのです。

秘密図書館の本は閉鎖された街での貴重な心の栄養でした。本は空腹を忘れさせ、素晴らしい別世界に連れて行ってくれるのです。

心の栄養は本だけではありませんでした。それは仲間です。図書館では講座やイベントも催されました。そのおかげで、読み書きが苦手だという理由で図書館を嫌っていた人たちにとっても、図書館は仲間と語り合い人とながる大事な場所になったのです。

秘密図書館にはもう一つ重要な役割がありました。それは学びの場としての役割です。街に残った人の多くは大学生でした。中学生もいました。そういった学生たちは街が閉鎖されたことで学びの場を失っていたのです。

学生たちは本を通して世界を学び、講座を通して知識を分かち合いました。何のために学ぶのでしょうか。

それは自分たちの、国の、未来のためです。国を復興させてよりよい社会を築くためです。

本は閉ざされた街に開かれた窓であり、よりよい社会へと続くはしごでした。本は未来への希望でした。

それは今ここにいる私たちにも当てはまることです。

よく、一冊の本が人生を変えたという話を聞きます。今はインターネットでどんな情報も仕入れることができます。様々な人の意見を聞くこともできるのに、なぜ本なのでしょう。

それは、本が心のより深いところに触れるからだと思います。インターネットやテレビの情報は広いけれど、浅くてすぐに忘れてしまうものです。しかし本は違います。本は著者や登場人物の心の底を見せてくれます。深く考えたいのでそこに至ったのだ、ということを見せることで読者の心の奥深くに沈み込み、感情を揺さぶり、読者自身で考えることを促すのです。それが本当の学びというものではないのでしょうか。

本がずっと昔から愛され、今も廃れないでいるのは、深く考えぬいて書かれたものだからです。深い学びをもたらし、ときに読む人の人生を変えてしまう本は、きつとどんなに便利さが求められる社会でも必要とされることでしょう。

今、私たちは当たり前のように本に囲まれて生きていますが、それを手に取る機会は少なくなっています。

困難に直面したとき、本を手にとってみてください。辛い時こそ本が力になることは、ダラヤの人たちが教えてくれました。もしかしたら、その一冊があなたの人生を変える大きな希望になるかもしれません。

## 奨励賞

東京都立桜修館中等教育学校 二年

### 佐藤文音

#### 戦争と人々の思い

特攻隊。一度はその名を聞いたことがあるだろう。学校の授業などで耳にしたことがある人もいるだろう。特攻隊とは、自分の命を犠牲にして爆弾をつんだ航空機ごと敵艦隊に突っ込むという任務を与えられた隊のことだ。その最期は悲惨なものだった。

皆さんは知覧高等女学校をご存知だろうか。戦時中、特攻隊員の身の世話をしたのが、この女学校の生徒だった。二十三日にわたる女学生達と特攻隊員の戦いを再現したのが「戦場のなでしこ隊」という映画だ。それを父が私に見せてくれた。もうそれは「悲惨」を超えていた。地獄よりもつらいのではないかと思った。授業では特攻隊員一人一人の心の内までは教えてもらえない。そのおおまかな内容くらいしか知らなかった私は、大きな衝撃を受けた。特攻隊員の気持ちを知り、それを見ていた一時間に五回は泣いた。結局、恐ろしいやら悲しいやらで最後まで見ることが出来なかった。しかし、多くのことを胸に刻み込んだ。

「戦場のなでしこ隊」を見て強く思ったことは、戦争は絶対におこすべきではない、ということだ。そんなことは当たり前と言われるかもしれない。勿論そうだが、今まで私は多くの人の命を奪ってしまうことから、戦争は二度と起こすべきではないと感じていた。つまり、亡くなった人や、その家族の細やかな気持ちを合わせて考えていたわけではなかったのだ。しかし「戦場のなでしこ隊」を見て、戦争で亡くなった人の気持ちを細かく知った。臨場感のある

生々しい映像を見て、改めて戦争の怖さを思い知らされた。

特に印象に残った場面を紹介したい。私が、本当に命を大切にしようと思っただシーンだ。

ある特攻隊員の母が息子を訪ねて来た。息子の無事を確かめに来たのだ。その息子は母親に自分が特攻隊員であることを伝えていなかった。そして、その息子は次の日が突撃する日だったのだ。母が訪ねて来た日は、母子が会える最後の日だったのだ。母を悲しませなくなかったから伝えなかったのだろう。彼の気持ちを汲み取って友達も伝えなかった。母子は再会を果たし、喜び合っていた。母は息子に、あんたは特攻隊員じゃないのね、違うのね、と何度も確認し、息子も何度もうなずいてあげていた。やがて、息子が宿舎に帰らなければならぬ時刻になり、見送ることになった。母は見送るとき、

「あの子は特攻隊やんね。」

と、言った。私はとても驚いた。母は勘付いていても息子の気持ちを分かっている、知らないふりをしていただけなのだ。親子共にお互いに相手をとっても大切に思っていたことが伝わってきた。明日には死ぬかもしれない息子の後ろ姿を無言で見送る母親はどんなに辛い思いであっただろう。自分を愛してくれる人がいる中で死に行かなければならない息子はどれ程苦しんだだろう。

親の愛は子供には想像できない程だと思ふ。自分を愛してくれる人達のためにも命は大切にしようと思つた。

戦場では人々は死と隣り合わせだった。特攻隊は死は名誉と言われ、特攻できなければ非国民と言われていた。死ねと言われたも同然ではないか。とても理不尽だと思つた。なぜ、この人達は、死ななければならなかったのかと、とても悔しかった。戦争で得たものは失つたものより価値があったのだろうか。

私は戦争を経験しなかったから、その苦しみはわからない。だが、想像することはできる。きつと後悔しただろう。私達はもっと知るべきだ。戦争がどんなものなのか。そして、繰り返してはいけないと全ての人が思わなければならぬと思う。

## 奨励賞

東京都立桜修館中等教育学校 二年

島田 海

## 手紙を書くことについて

「よし。」書き終えたばかりの便箋を見て小さく呟く。便箋を二つにたたむ。ここで失敗したくはない。便箋の角と角をきちんと合っているか確認しながら細心の注意を払い、慎重に折る。それから封筒に宛名と自分の名前を書く。相手の名前は心を込めて丁寧に。そして封筒の中に便箋を滑らせ、封をする。後は切手を貼ってポストに入れるだけだ。

宛先は小学校時代の友達。私は今、文通をしている。

きっかけは去年の五月のことだった。私は新型コロナウイルス感染拡大の影響で中学校に通えず、暇を持て余していた。そんな時、保育園に通っていた頃に友達にもらった手紙を見つけた。久しぶりに見たそれには小さい子供特有のぐにやぐにゆとした大きな文字が所狭しと並んでいた。懐かしさを感じてそのままなんとなく文字を眺めていると、ふと誰かに手紙を出したい、そう思った。長い時間を経ても楽しめる手紙というものが素晴らしい、そう感じられて自分もこんな時間を誰かと共有したい、そう思ったのだ。

メールやトークアプリで簡単に人と繋がることのできる現代では手紙なんて時間もかかるし堅苦しいと感じるかもしれない。年に数回程度しか手紙を書かないという人も少なくはないだろうし、年賀状だけという人も中にはいるだろう。

確かにコミュニケーションツールが普及している今、手紙を書く機会はその程多いものではない。しかし、だからといって手紙を書く機会が完全に失われたというわけでもないだろう。デメリットもあるかもしれないが、直筆の手紙ならではの良さも多いと思う。

まず一つ目に、手紙はメールや電話よりも自分の気持ちを相手に伝えられると思う。文字には書いた人の個性が現れる。それは機械に打ち込まれた無機質な文字に現れるようなものではない。だからこそ、手紙の一字一字に込められた気持ちが相手に伝わるのではないだろうか。

次に、手紙はずっと手元に残り続ける。メールは手紙よりもずっと手軽にメッセージを送ることができるが、携帯電話が壊れてしまったり、データが飛んでしまったりしたら簡単にメッセージが消えてしまう。だが、手紙は違う。燃やしたり、捨ててしまったりしない限りずっと手元に残り続ける。そして何度でも読み返すことができる。きっと初めて読んだときと、しばらくたってから読み直したときでは同じ文章でも感じ方が変わってくるはずだ。そうした変化も手紙の魅力の一つだろう。

そして最後に、手紙の一番の良さは、手紙の内容を考える時間にあると思う。何を書くのか、どう表そうかと相手のことだけを考える時間。それはいつもより相手のことを想像して思いやる時間だ。それだけではない。今日までの日々の中から、伝えたい体験や思いを探して選ぶとするこの時間は、きっと自分にとっても優しい時間だ。私は、自分も相手も大切にできるこの時間が大好きだ。

こんな時代だからこそ、貴方も手紙を書いてみてはどうだろうか。友達の誕生日にお祝いの手紙を。遠く離れた親戚に自分の近況を伝える手紙を。両親に日頃の感謝を伝える手紙を。きっとその手紙を受け取った人は嬉しいはずだから。

## 奨励賞

東京都立大泉高等学校附属中学校 二年

霜鳥隼杜

## 自転車から学んだこと

「ちよつと君危ないよ！」夜に響く大きな声に恐怖を抱いてしまった。

皆さんは、『普通自転車専用通行帯』という言葉を知っているだろうか。皆さんも一度は目にすることがあるものだと思う。道路の左側のところに、白い自転車マークと矢印が書いてあるものがある。このマークがある場合原則として自転車はここを走らなければならないというものである。

近年、自転車での事故が目まぐるしく増えている。当時、十一歳の男児が夜、自転車で走行していたところ、歩道と車道の区別がない道路において歩行していた六十二歳の女性と正面衝突してしまった。その女性は、頭の骨を折るなどし、意識が戻らない状態となったのである。この判決が裁判所から出たとき、高額な賠償額であること以外に、子供が起こした事故について母親に出された支払い命令であることが大きく報じられ話題になった。これは、子供が自転車事故を起こすと親が責任を負う場合があるということを示した賠償例でもある。

このことから私は、自転車や自動車のように交通ルールがあるものは、必ずルールを守るべきだと思う。なぜなら、そのルールを守ることが、交通事故防止につながると思ったからだ。また、交通ルールを守るためには、道路を使う全員が、交通ルールを認知しないとイケないと思う。

これは、半年前に起きた私自身の話である。私が夜に自転車で、自宅に帰ろうとしていると、大きな通りだったため、普通自転車専用通行帯を走行していると、後方から走ってきた自動車の運転手の方

に注意された。

「ちよつと君危ないよ！自転車なんだから、車道で走っちゃダメでしょ！」当時は、恐怖を感じたため、「すいません。」と、一言言って、歩道に戻り走りなおした。しかし、今考えれば、なぜ歩道に戻ったのだろうか。正直冷静になって今考えてみれば、私は悪いことはしてないのではないだろうか。普通自転車専用通行帯とは、道路交通法で決められたものであるため、守らなければならない。しかし、それを守った私が注意されるのはおかしいのではないだろうか。気になった私は、「自転車、道路」とインターネットで調べてみると、予測交換で「自転車、道路、邪魔」と出てきた。そう、車道を走る自動車の運転手にとって、自転車は邪魔なのである。つまり、私は、自転車で走っている際に、交通ルールを守って車道を走っていたが、自動車の運転手にとっては、危なくて邪魔だと感じていたということである。

しかし、もし逆に私が常に歩道を自転車で走っていたらどうなるだろうか。特に、大通りは自動車がスムーズに走れるように、各方面二車線や三車線のところが多いため、その分歩道が狭くなる。そこに、自転車が通ったら、歩行者と事故にあう可能性が高くなると思う。その結果、事故になったら、相手の方や、そのご家族の方、そして子供である私は、自分の両親にも迷惑がかかってしまう。

このように、法律等でルールが決まっていますが、必ずしもすべての人が良好に捉えているとは限らないのだと学んだ。正直、この経験で、普通自転車専用通行帯を走ればよかったのか、歩道を走ればよかったのかなんてわからない。しかし、自転車が普通自転車専用通行帯を走らなければならないという法律があるのは事実であるため、今後は自分がとった行動に自信を持って生活しようと思う。そうして、自分がとった行動に責任を持つことで、過ちを起こさないようにしたい。そのようにすることで、親や家族に迷惑をかけないようにしていきたいと思う。また、話し合い等で、どちらが正解かわからないときは、一方的に意見をぶつけるのではなく、もう一度自分の考えが正しいのかを見つめ直し、多くの人が納得できる最善策を皆で話し合っていきたいと思う。そうすることの大切さが、今回の経験から学んだことであると心から思う。

## 奨励賞

東京都立桜修館中等教育学校 二年

## 樋口愛菜

## 個性と多様性

私には、発達障がいのある友達がいる。彼女と出会ったのは、私が小学校二年生の時だった。

転校生としてやってきた彼女の第一印象は、「なんだか変な子」だった。今の私ならすぐに発達障がいと結びつけることができただろう。しかし、当時は自分と違うということしかわからなかった。彼女の話すことは幼稚園生のようにだった。教科書の音読では、彼女の時だけ他の人の二倍くらいの時間がかかった。私は彼女を敬遠し始めた。みんなと同じじゃない彼女のことを、怖いと感じた。

ある日、道徳の授業で、発達障がいの子の話を讀んだ。障がい者だけど、頑張っているというような文章だった。私は理解した。彼女はこの文章の子と同じなのだ。私は今まで彼女に抱いていた感情を申し訳なく思った。障がい者だからと言って、距離を置いたらかわいそうだと思った。次の日から、私は彼女に声をかけるようになった。はじめは朝「おはよう」と言うだけだった。彼女は今まで声をかけた誰よりも嬉しそうに「おはよう」と返してくれた。それから隣の席になったことをきっかけに、彼女の世話をたくさんするようになった。先生の話が理解できていなければ、わかりやすく教えてあげた。何か言いたげにしていたら「どうしたの？」と優しく聞いていた。一生懸命話す姿がかわいかった。ノートの書き漏れを代わりに書いたこともあったかもしれない。親切にしていたし、彼女も喜んでくれた。私は自分の行動に満足していた。

その頃、私はヘレン・ケラーの伝記を讀んだ。多くの障がいを持つヘレンと

二人三脚で歩んだサリバン先生の行動が、私に大きな衝撃を与えた。ヘレンのわがままを治すため、叱って、時には叩いたりもした。さらに、できないことがあるとすぐに手を貸していたヘレンの両親に数か月離れて暮らす、と言いつ出した。「何でもやってあげていては、ヘレンがダメになってしまいます。」この言葉は、私にとつてとてもショックだった。障がい者は、助けてあげるべきだ。優しくしなければならぬ。この考えは間違っていたのか。私のしたことは、やりすぎに含まれるのか。よくわからなかった。考えるほど混乱して、彼女の手助けがおっくうになってしまった。私は前より彼女と関わらないようにした。私の気持ちの変化に気づいたのか、彼女から話しかけてくるのが減った。

二年生最後の日、担任の先生がプリントを配った。先生が伝えたいことが詰まっていた。その中に「互いが助けあう」という項目があった。どんな人にも長所と短所がある。その凸凹をうまくいかせれば、素敵な友達関係が作れる。その文を讀んで、私はハッとした。私が彼女を助けていたのは、「障がい者」だからだった。それが上手くいかなくなった理由だったのだ。自分の得意なことを生かして、それが苦手な人を支える。障がい者や健常者というくりは必要なかった。健常者でも苦手なことはあるし、それを障がい者が補うこともあるはずだ。

私に必要なだったのは、障がいを一つの個性としてみることだったと思う。障がい者だからといって特別に優しくするのは、結局差別だ。数学が得意じゃない友達にヒントを出す。リレーで足の速い子が遅い子をフォローする。それと同じだ。障がい者か、健常者かの前に、一人の人だ。そう考えて、多様性を認めることが大切だ。

人の多様性を認める第一歩は、自分を大切にすることだと思う。自分は、世界に一人しかない存在だ。そう気づくことができれば、自然と相手の存在もそのまま受け止めることができるだろう。この人も世界に一人の存在なのだと。だからこそ私は大きな声で言いたい。自分らしさに、自信をもって生きて欲しい。それはきつと、どんな人でも暮らしやすい世界につながっていると思うから。



## 奨励賞

立川市立立川第一中学校 二年

## 日野栞那

## 災害への「備え」

災害は、いつ、どこで起こるか分かりません。

昨年の七月には、九州、中部地方を中心に豪雨が発生しました。川の氾濫、浸水が相次ぎ、被害はとても大きいものでした。私たちが住む立川市も、いつ大雨が降ってこのような被害にあうか分かりません。他にも、地震、台風、噴火など、どれも被害の大きい様々な災害があります。

国内史上最大の地震となった東日本大震災は、最大震度七の揺れを観測し、津波や福島第一原発などの二次災害の被害もとても大きなものでした。死者・行方不明者は合わせて二十万人を超え、東日本は絶大な被害を受けました。

私の祖父と祖母は、宮城県の石巻市に住んでいます。東日本大震災の被害にあった約二か月後、手紙を送ってくれました。

震災の後、町を見に行ったとき、本当に自分が住んでいる町なのかと目を疑ってしまっただけです。普段目にうつっていたものは、ほとんど津波にのまれて消え、建物のがれきや土砂でうめつくされ荒れはてた町は壊滅状態でした。海沿いや、つぶれた建物の中などたくさん場所から遺体が見つかりました。石巻市は津波の被害にもあい、祖父と祖母の住んでいる場所は、ひざ位まで津波がおしよせたそうです。

東日本大震災から十年経った今、もらった手紙と東日本大震災の津波や被災地の様子をうつした写真集を読み返しました。東日本大震災が起きたとき、私はまだ三歳だったので、その時何が起こったのか理解できていないし、覚えて

いません。実際に津波を目にしたわけでもありません。ですが、手紙と写真集を改めて読んだとき、実際に経験していなくても、地震にあったときや津波を見たときの恐ろしさが伝わってきました。災害は、突然起こり、簡単に命やものをうばい、傷つけてしまうものなんだと思いました。災害から大切なものを守るために、何をすべきなのか考えていかなければなりません。

もらった手紙には、災害への備えについて二つのことが書かれていました。一つ目は、物の備蓄です。祖父と祖母は、事前に水、食料、生活用品を備蓄していたため、震災直後の生活でも不便を感じたことは無かったです。私も、いつ災害が起きても大丈夫なように、前もって物の備蓄をしておこうと思います。

二つ目は、家族との絆を大切にすることです。家族だけでなく、友達、地域の方々など、周りの人との絆、つながりが、災害にあったときの助けあいにつながると思います。ですから、周りの人と協力できることを少しずつ探して取り組んでいきたいと思っています。

私が災害への備えとして一番大切だと思うのは、自分の心の備えです。災害時は、恐怖や不安で冷静になれず、パニックになってしまうと思います。その中で、冷静に指示を聞いて行動することが大切だと思います。ですから、日頃の学校の防災訓練などを積極的に取り組んでいきたいです。また、どんな災害があったときにどういう行動をとるか、あらかじめ考えておくことで、災害時に落ち着いて行動できるようにしたいと思います。

首都直下地震は、約三十年以内に七十%の確率で起こると予想されています。私たちも、いつ大きな地震にあい大きな被害を受けるか分かりません。東日本大震災では、津波は来ないだろうと避難せず亡くなった方もたくさんいました。逃げると必死に声をかけられて避難し、助かった方もたくさんいたそうです。一人一人が危機感を持つことで、命を守ることに繋がると思います。私も、いつ、どこで起こるか分からない災害から、命を守るために、日頃から危機感を持って過ごしていこうと思います。

## 奨励賞

立川市立立川第五中学校 三年

若林 熙

## 休校中に学んだこと

三月の後半ごろから始まった休校、私にはこの休校期間で学んだことがあります。それは、「あたりまえ」の大切さです。

私はもともとよく、「もっと休みがほしい」「学校めんどくさい」と思っていました。だから正直、ニュースで全国の学校が休校になると聞いたとき、うれしい気もちになりました。そのとき私は春休みが長くなった気分でワクワクしていました。しかし、担任の先生の一言で私の気もちは一気に変まりました。「本当だったらもっと、このクラスと過ごすことができた。」

この一言で私は、もうこのクラスで過ごせないんだと気づかされました。たしかに行事もつづれ、授業も給食もクラスのみんなと過ごす時間もなくなってしまう……そう考えるとこの休校期間は「休みができた」のではなく「時間が奪われた」んだなと気づきました。

休校期間に入り、いろんなところが休業し始め、友だちにも会えなくなりました。始めのころは、テレビを見たり、学校から出された課題をやったりして時間をつぶしていましたが、それが一ヶ月も続くと、テレビも見飽きてきて、課題もたまっているのにやる気が出ず、毎日なんだか心の中がくもって、霧がかかっているような気分でした。前はめんどくさいと思っていた学校にいつのまにか、行きたくなっていました。最初の登校日はものすごく楽しみでした。

課題を出しに行くだけなのに、学校に登校する朝の気分や通学路を歩く感覚が久しぶりすぎていつもなら憂うつな時間も、楽しみで浮かれました。登校日も増えてみんなと会えるようになり、授業も本格的に始まり、大げさかもしませんが毎日がとても幸せでした。また、最近私は、休み時間に教室の後ろの棚よりかかって、ついみんなをながめてしまいます。男子たちがふざけていたり、女子たちが集まって楽しそうにしゃべっていたり……静かに本を読んでいる子もいれば、ポーツと窓の外をながめている子もいます。私はそんなあたりまえな風景が大好きです。

この自粛期間で私のように、もしかしたら私よりもたくさんの大切な時間を奪われた人が数えきれないほどたくさんいると思います。しかし、私のように「あたりまえ」の日常の大切さを学んだ人もその分たくさんいると思います。前まではいつもどおりの毎日に不満ばかり言っていた私も、今ではいつもどおりの毎日が幸せでたまりません。大変な毎日でも苦労ばかりの毎日も、大切な「いつもどおり」の毎日なんだと思います。

私は、この休校期間で一番大事にしなきゃいけないのは、「あたりまえ」で「いつもどおり」の日常で、それは簡単に奪われてしまうものだといいことを学びました。だから、これから私は大変な時でもこのコロナの自粛期間を思い出して乗りこえて「あたりまえ」に大変だと思えて、「あたりまえ」にいつもどおりの毎日を過ごせることが幸せだと感じられる大人になりたいです。

審査員長講評

十文字学園女子大学教授

富山 哲也

本日発表された主張について講評をさせていただきます。  
まずは大変審査が難航しました。全てが大変素晴らしい発表で、そこから選んでいかななくてはいけない難しさがありました。では、一人一人の発表について簡単に触れさせていただきます。

大澤さんは、手話での発表でした。手話を通じて、その熱意が大変よく伝わってきました。差別を受けながらも諦めないという気持ち、聞き手に一貫して伝わってまいりました。

奥山さんの発表は、戦時中についての想像力が大変素晴らしいと思われました。戦争については、皆さんの世代でも遠い昔の話になってしまっています。その中で、中学生でありながら想像力を豊かに働かせているところに感心しました。

鹿島さんは、自殺のを取り上げていますが、データに基づいてフリッツも効果的に使っていました。子どもの自殺が世界的な問題であるという訴えが、よく伝わってきました。菊池さんの発表では、「異常」ということと「少数派」ということは違うんだという主張が繰り返して述べられていました。それが自身の経験と絡み合っていて、説得力がありました。

坂口さんの発表では、お兄さんに対する複雑な気持ちの変化が率直に語られていました。丁寧な描写と語りによって心情が細かく伝わってきて、大変感銘を受けました。

佐藤さんは、障がいのある人に接する時の戸惑いを率直に語られていて、共感しました。特に相手の気持ちに思いをいたすところが、感動



をもって伝わってきました。

下津浦さんの発表は、大変丁寧な話し方が印象的でした。次の世代の「大人」って何だろうということ真剣に考え、目指す大人になろうとする決意が、よく伝わってきました。

住吉さんは、SDGsについて取り上げていましたが、自身が関わっている具体的な活動が大変細かく説明されていて、実践的に取り組まれていることがよく分かりました。

乳井さんの発表も同じくSDGsについて扱われていました。世界中の様々な国の取組みについてとても詳しく調べて発表しており、視野の広がりを感じられました。

吉田さんは、自身のケガをした経験に基づく発表で、「物」のバリアフリーだけでなく、人と人との助け合いが必要だという主張が大変胸を打つものでした。

一時間弱の発表時間でしたが、現在の日本や世界が抱えている様々な問題について、中学生としての感覚を磨きながら、豊かに、そしてストレートに考えていることがよく伝わってまいりました。その中で、特に自分の考えがしっかりと形成されている発表を高く評価しました。また、原稿を読んだときは別に、実際に話を聞きながら伝わってくる説得力の強さも加味しました。話し方については、抑揚を強調する方、淡々と話される方に分かれましたが、それぞれの主張にマッチしていることが大事だと感じました。

なお、気になった点として、原稿の段階では、残念ながら誤字脱字がいくつもありました。提出する前に、今一度見直しをしてほしいと思います。また、必要以上に文を細かく区切って話す様子が一部で見られました。中学生以上のスピーチの場合、逆に聞きづらく感じることもあるので注意してほしいと思います。

コロナ禍の中ではありますが、やはり、このような素晴らしい考えをもっている中学生の皆さん、御家族の方、指導者の方が一堂に会せることの意味というのは大きいものがあるのではないかと思います。

この会場で感じられた「熱気」を一人一人が受け止めて、さらに、未来に向かって成長していただければと思います。

大変難航ではありますが、講評といたします。今日は、発表を聞かせていただきありがとうございます。ありがとうございました。



## 最終審査員の感想

## ノンフィクション作家

川内 有緒

文章を書く上で大切なことのひとつは、いかに「自分の言葉」で書くかということだと思います。どこかで見聞きしたり、本などから借りてきたそれらしい言葉ではなく、あくまでも自分の体験に基づき、自分の心の内側から生み出された言葉。そこには、圧倒的に伝える力が宿っています。今回、知事賞及び東京都教育委員会賞を受けた三作はその点において特に優れた文章だったと感じました。また実際の発表に関しては、ドラマチックな読み方もあれば、淡々としながらも説得力があるものもあり、どれも多分に人を惹きつける力を持っていました。大勢の大人の前で堂々と発表した今回の経験は、この先の人生でも必ず役に立ち、糧になることでしょう。

## 東京都私立中学高等学校

父母の会中央連合会副会長

中野 久美

発表の当日、十名の皆さんの声を直接伺い、言葉が心に響き、今も残っています。前もって原稿を読ませていただいております。したが、お一人お一人の声や表情からは読んだだけではわからない言葉の重みが伝わってきました。ご自身の身近なところでの気づきから、思いやりの心を持ち、社会において自分達が果たす役割を見つけ行動を起こしている皆さん、とても頼もしく思いました。また、ろう学校に通う生徒さんが言語である手話で発表してくれたのも驚きと共にとっても嬉しく思いました。皆さんの言葉の中にあつた、多様性を認めお互いを支え合い皆が幸せになる社会となるよう、これからもご自身の言葉を発信し続けてください。皆さんのご活躍を応援しています。

## 東京都公立中学校PTA協議会会長

関口 哲也

たくさんの感動を聞かせて貰う機会に同席させて頂きましてありがとうございます。主張内容は、SDGs（持続可能な開発目標）に対してどのように取り組むべきか自ら調べ苦労されたことが感じることが出来るものや、障害のある方とその周りの方の心の葛藤なども表現された話もあり、非常に内容の濃いものでした。現状の社会の問題に、中学生として真剣に向き合っていることはとても素晴らしいことだと思います。事前の書面原稿で皆さんの主張を拝見した時と、大会当日の皆さんを傾聴した時、同じ主張内容でありながら異なる印象を与えられることや、自らの表現により伝えることの素晴らしさに気付かされる機会でもありました。今後の成長過程において、自分の考えや思いを主張する機会があると思いますが、豊かに大いに表現されることを期待しています。

東京都教育庁指導部 義務教育指導課長

中嶋 富美代

収束が見えないコロナ禍であっても、次代を担う子供たちが着実に成長している姿を見ることができた、未来への明るい希望を感じる大会でした。十名の発表者一人一人が、中学生らしい新鮮かつ豊かな感性で、身の回りの出来事や社会的問題について課題意識を持ち、具体的な解決策を等身大で提言し、自分の言葉で発表してくれました。

特に、今年の発表内容は、共生社会の実現や障害者理解、命の大切さ、SDGs、多様な性の在り方に関する事等、例年以上にテーマが多岐に亘っていました。多くの活動が制限される中、子供たちが様々な課題に対して当事者意識を持ち、深く考え、社会の一員として積極的に解決策を考えていることを、強く実感することができた大会でした。

発表者の皆さんには、当日までの準備に対するねぎらいと、未来への希望を感じさせていただいたことへの感謝の言葉をお伝えしたいと思います。お疲れ様、そして、ありがとうございました。

東京都生活文化局 都民生活部長

馬神 祥子

本日の皆さんのスピーチは、大変素晴らしいものでした。

皆さんの主張には様々な視点があり、コロナ禍にありながらも、自分と真摯に向き合う姿勢や世の中の矛盾に違和感を覚える様子、多様性について思いをめぐらせるなど、内容は多岐にわたるものですが、どれも、心の中心の思いや感情の変化を正直に表現していました。感銘を受けたり、心を揺さぶられたりしました。さらに、スピーチでは自身の表現で伝えられるため、作文で読む以上に明確に伝わり、強い発信力を感じました。

皆さんの主張とそのためへの提案、未来に向けてできることやすべきこと、そのために必要なことなどが、今後、文集や配信映像を通じて、より多くの方へ届き、それぞれに受け止めていただけることを期待しています。

今回「中学生の主張」に参加した全ての皆さんが、これまで以上に広い視野と柔軟な発想をもって自己や社会と向き合いながら、ますます成長されることを願っています。



審査の様子



審査員の皆様

## 令和3年度 中学生の主張東京都大会 当日の概要

- 日 時 令和3年9月12日（日曜日）午後2時から午後4時30分まで
- 場 所 東京都庁第一本庁舎大会議場
- 主 催 東京都
- 次 第 開 会
  - 1 あいさつ 東京都生活文化局都民生活部長 馬神 祥子
  - 2 中学生の主張 発表者10名  
— 審査 —
  - 3 表彰式
    - (1) 審査結果発表 審査員長 富山 哲也
    - (2) 表彰状贈呈
- 閉 会

### ○ 審 査 員

《審査員長》	富山 哲也	十文字学園女子大学教授
	川内 有緒	ノンフィクション作家
	中野 久美	東京都私立中学高等学校父母の会中央連合会副会長
	関口 哲也	東京都公立中学校PTA協議会会長
	中嶋 富美代	東京都教育庁指導部義務教育指導課長
	馬神 祥子	東京都生活文化局都民生活部長

### ○ 審 査 基 準

#### (1) 論旨・内容について

- ア 中学生らしい新鮮な主張であるか。
- イ 個人の感想や体験にとどまらず、一般性・社会性があるか。
- ウ 提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか。
- エ 論旨が一貫し、構成がしっかりしているか。
- オ 表現が適切であるか。

#### (2) 論調・態度について

- カ 声、言葉は明瞭で聞きやすいか。
- キ 話しぶりに熱意と迫力があるか。
- ク 主張の内容が、聴衆に共感と感動を与えているか。
- ケ 聴衆をよく見て、落ち着いて話したか。

## 【参考】令和3年度 中学生の主張東京都大会 募集概要

### 1 応募資格

東京都内に在住または在学の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にあるもの。

(令和3年4月1日現在)

### 2 テーマ

- (1) 社会や世界に向けての意見、未来への希望や夢、提案など。
- (2) 家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。
- (3) テレビや新聞等で報道されている社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。

上記のような内容で、心からの思い、考えたことや感銘を受けたことなどを、自由にユニークな飾り気のない言葉でまとめたもの。1,400字から1,800字までの字数で4枚ないし5枚の原稿用紙（400字詰め）に書かれた、縦書きの作文とする。

### 3 締切

令和3年7月15日（木曜日）

### 4 審査及び表彰

主催者において、大会の前に中学生の主張東京都大会発表者（出場者）10名及び奨励賞10名を選考し、8月中に在籍校に結果を通知する。大会当日は発表者10名が、応募した原稿に基づいて5分程度の発表を行い、審査員の協議で知事賞（1名）、東京都教育委員会賞（2名）、優良賞（7名）を選考した後、表彰を行う。

### 5 その他

- (1) 知事賞受賞者を、独立行政法人国立青少年教育振興機構が主催する「第43回 少年の主張 全国大会～わたしの主張2021～」の出場候補者として推薦する。
- (2) 応募者全員に、参加賞として記念品を贈呈する。
- (3) 受賞作品を発表文集にまとめ、学校等へ配布する。
- (4) 受賞者の写真、氏名、学校名、学年及び作品名を、東京都のホームページと発表文集に掲載する。

## 応募状況

### 1 今年度の応募状況

(単位:人、団体)

応募者数				応募団体数
1年生	2年生	3年生	計	
221	2,633	3,078	5,932	57

### 2 過去の応募状況

(単位:人、団体)

年度	応募者数	応募団体数
昭和 54	219	-
55	184	-
56	265	37
57	454	40
58	142	27
59	169	39
60	230	40
61	289	58
62	509	79
63	527	80
平成元	742	102
2	326	70
3	355	67
4	472	69
5	385	36
6	280	53
7	259	48
8	230	40
9	500	58
10	739	45
11	491	37

年度	応募者数	応募団体数
12	639	42
13	797	41
14	562	37
15	736	48
16	1,961	60
17	1,552	58
18	2,230	84
19	1,919	86
20	2,276	79
21	4,105	105
22	3,153	98
23	1,864	77
24	3,316	93
25	3,739	72
26	8,446	97
27	9,983	95
28	8,620	95
29	7,781	70
30	6,878	62
令和元	5,784	52
2	6,482	65



過去の入賞者（直近3年間）

平成30年度（第40回） 平成30年9月9日・東京都庁大会議場

賞	学校・学年	氏名	作品名
知事賞	筑波大学附属中学校・2年	國井結月花	「教育」を手に切り拓け
東京都教育委員会賞	台東区立忍岡中学校・3年	大谷 起也	これからの社会で生きるために
	東京都立大泉高等学校附属中学校・2年	谷本 華奈	自己主張は悪いこと？
優良賞	立正大学付属立正中学校・3年	赤松 愛実	みえないカタチ
	立正大学付属立正中学校・3年	坏 琴美	意思よりも道を
	國學院大學久我山中学校・3年	池田 倫	個性の輝き
	東京都立大泉高等学校附属中学校・2年	岩田 佳晃	増やそう、リアルの友達
	立川市立立川第二中学校・3年	野村 未恭	トータルコミュニケーション
	千代田区立九段中等教育学校・3年	藤田 実佑	情報が錯綜する世界
	工学院大学附属中学校・3年	丸山 夏未	初めての外国の友達

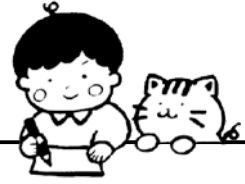
令和元年度（第41回） 令和元年9月8日・東京都議会議事堂都民ホール

賞	学校・学年	氏名	作品名
知事賞	筑波大学附属視覚特別支援学校（中学部）・1年	藤田 大悟	心の扉
東京都教育委員会賞	立川市立立川第七中学校・3年	張替 望恵	尊い命は繋がっている
	台東区立忍岡中学校・3年	本間 樹音	国際人とは
優良賞	東京都立大泉高等学校附属中学校・3年	倉島 菜帆	心のかべをとりはらおう
	東京都立大泉高等学校附属中学校・3年	瀧澤 結	スマホに使われない
	世田谷区立芦花中学校・2年	津留 歩花	安全な社会作りのために
	國學院大學久我山中学校・3年	不破 萌瑛	「黄色い四つ葉のクローバー」
	國學院大學久我山中学校・3年	前田 華果	本当の最後のスリッパ
	稲城市立稲城第五中学校・2年	皆川 桜	私達にできること
	葛飾区立立石中学校・1年	柳川 天我	僕達はなぜ学校に行くのか

令和2年度（第42回） 令和2年9月13日・東京都庁大会議場

賞	学校・学年	氏名	作品名
知事賞	葛飾区立青戸中学校・1年	松本直汰郎	普通とは何か
東京都教育委員会賞	北区立浮間中学校・2年	大宮 幸穂	舞台上上がる
	板橋区立志村第四中学校・3年	鹿島 菜乃	魔法
優良賞	世田谷区立芦花中学校・3年	太田 佳奈	見えない優しさ
	あきる野市立増戸中学校・2年	奥山 朋佳	「私の祖父母」
	立正大学付属立正中学校・2年	神本 真宏	感謝の気持ち
	立川市立立川第一中学校・2年	黒澤 美春	思い切って行動に移そう！
	学習院女子中等科・2年	高橋 亜依	見えない相手からの言葉の暴力
	目黒区立大鳥中学校・3年	西田 圭吾	レッツチャレンジ精神
	品川区立荏原第一中学校・2年	藤沢 亮吾	学校休業で僕が考えた事・感じた事

# 令和3年度 中学生の主張東京都大会 動画配信について



大会当日の様子を東京都の公式 YouTube チャンネル【東京動画】で公開しています。  
ぜひ、発表者の皆さんのスピーチを御覧ください！



配信ページURL：

- ① 【開会・発表】 <https://tokyodouga.jp/fwust5gweng.html>
- ② 【表彰式】 <https://tokyodouga.jp/qlwjtdm3ry.html>



① 開会・発表



② 表彰式



## 編集後記

今年度も、中学生の主張東京都大会に応募される皆さんの作文を心待ちにしていました。様々なテーマに対する主張が寄せられ、中学生らしい率直な言葉で綴られた作文の一つ一つから、実際にスピーチを聴いてみたいと想像が膨らみました。

大会当日は堂々とした発表者の皆さんのスピーチが胸に響きました。また、周囲へ丁寧に挨拶をしたり、大会終了後は発表者同士が交流し、互いに写真を撮るなど、積極的に大会に参加される様子に大変嬉しく思いました。

今回は観客を制限した中での開催となりましたが、発表者のスピーチを広く届けたいと思い、新たな取組として動画配信を行っています。また、文集では審査員の皆様からも当日の感想や発表者へのメッセージについて寄稿いただきました。

この文集が、中学生の皆さんにとって、同世代の人の考えを知り、さらに御自身の考えを深めるきっかけとなれば幸いです。また、地域の大人や保護者など、より多くの皆様にも、中学生の豊かな感性や考えが届くことを願っております。

最後になりましたが、文集作成にあたり御協力いただきました皆様にも心より感謝申し上げます。

東京都生活文化局地域活動推進課  
「中学生の主張東京都大会」担当

## 閉 会

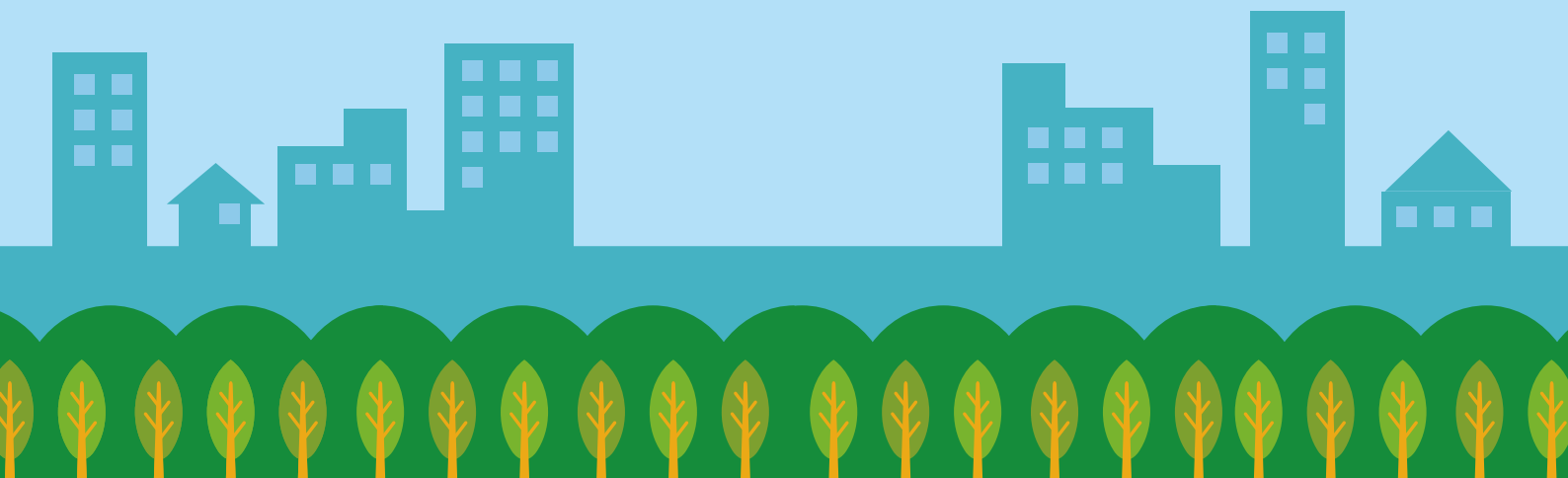


発表者と審査員の皆さん

## 表彰式



表彰の様子



登録番号 3 (18)

令和 3 年 12 月発行

## 令和 3 年度 中学生の主張東京都大会 発表文集

編集・発行／東京都生活文化局都民生活部地域活動推進課

〒 163-8001 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号

都庁第一本庁舎 19 階南側

電話 (03) 5388-3098

印刷／正和商事株式会社

〒 161-0032 東京都新宿区中落合一丁目 6 番 8 号

電話 (03) 3952-2154